

キャラクター名
荊棘女(Odorome)

プレイヤー名

シンドローム	ソラリス ブラム=ストーカー		ワークス	僧侶	カヴァー	歩き巫女
	オプション		年齢	十八	性別	♀
覚醒	感染	衝動	飢餓	初期侵食率	28	%
出自	貧乏	経験	物の怪	邂逅	恩人	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	24
肉体	1		0			1	行動値	6
感覚	2		0			2	(非装備時)	6
精神	2		0			2	戦闘移動	11
社会	3	1	0			4	全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC			交渉		6
回避			知覚	1		意志	1		調達		1
運転:			芸術:			知識:			情報: 噂話		1
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
ボイスチェンジャー	
情報収集チーム	
眞魚経典	
笏	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
取り憑かれしもの	P	N		
おかたりさま	P 傾倒	N 偏愛		
八築掉尾	P 憧憬	N 嫉妬		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 10 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
オリジン:サイバー	5	2	min		自身			
効果: 社会判定+Lv*2								
タブレット	3	2	aut		自身			
効果: SorEfc視界化, Lv/sc								
多重生成	2	3	aut		自身			
効果: 対象[Lv+1]体化								
活性の霧	5	3	set	至近	単体			
効果: ~r攻+Lv*3, ドッジ-2d								
鮮血の奏者	2	4	set	視界	単体			
効果: ~r攻+[Lv以下HP消費]*3								
絶対の恐怖	1	3	maj	視界	単体			
効果: 射攻+Lv, 装無視								
サンゲイン	1							
効果: BrmEfcHP消費+5換算								
竹馬の友	★							
効果:								
超越的能力	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

この時代珍しくはない飢饉がその村を襲った。口減らしのために老人や子供が捨てられた。彼女はその内の一人であった。喉が渴き、肋が浮き出、目玉は飛び出さんばかりに肉が落ちて瘦せこけていく。それでも人の生存本能が彼女を動かし、野草を、虫を、土を、先に死んでいった村人だったものどもを、全てを口に放り込んでいった。当然身体は壊れていき、病に侵されていったが、それでも飢えを紛らすために喰らい続けた。そうして屍の山を越えて意識が混濁した彼女の目の前に突如、小さなお社が現れる。罰当たりだ何だと躊躇いが脳裏を過ったが、その混濁した意識では飢餓感が最優先され、這いずりながらその社を汚していく。暗闇の中、戸を開けて入って手をつくると、ぴちゃりと水音があった。社の中は一面真っ赤な血で浸っていたのだ。そしてその中心には何か蠢く肉塊があった。未だ脈動する心の臓の様なそれに少女は近づいていく。最早畏敬や恐怖は麻痺し、飢えに突き動かされるままに、新鮮な肉に喰らいつく。獣の如き様相で食り、血を嘔る。ひたすらに口を動かし、辺り一面の血肉を平らげると同時に、体力の限界であったのか、意識を失う。

目覚めると社は無くなっており、ただ背後に積み上げられた骨が散らばるのみであった。飢餓感はまだ強く残っていたが、どうしてか身体はよく動くようになっており、不思議と力が溢れてきた。また、いつの間にか懐に一冊の本があった。それを開くと同時に頭の中に大量の音が流れてきた。老若男女問わない声の洪水は耳を塞いでも意味はなく、徐々に大きく強くなっていく。その中に一際明瞭に聞こえる声がある。男とも女とも、老人とも子供ともつかないようなその声は、「広めよ、声を、言葉を広めよ」と告げた。

どれだけ時間が経ったのか、いつの間にか意識を失っていた少女の心は、まるで生まれ直したかのように変貌していた。手元の本を大切に抱え、どこか焦点の合わない瞳は使命感を宿している。ただ崇高な目標を抱えども、その手段の検討がつかない彼女のもとにある尼僧が現れる。その人物は、少女と、そして見えざる声とすらも言葉を交わし、最後に少女が抱える本の一頁に少女だけにに向けた教えと、表紙に題を記した。

それから少女は尼僧となり教えを広める旅にでる。声に従い、その幼い姿のまま。

※注釈的な
・突然現れた社は幻影。具体的には言霊に宿るレネゲイドビーイング(オリジン:サイバー)であるそれは、その起源故にこの時代では形を取ることが困難であった(インターネットなんてねえんだよ)。そこに大量の人間の怨嗟と絶望といった強い感情と流血を媒介にして、加えて少女の意識が極めて混濁してトランス状態となっていたこと、媒介とした血肉を体内に取り込んだことなどの偶然が重なり、本来実体を持たないこのレネビを視認してしまった。そして、その疑似・仮想的な核を喰らったことで少女はオーヴァードとなった。
・本はレネビと少女のコミュニケーション手段みたいなもの。殆どのページは血文字で訳の分からない文字のようなものがびっしりと書かれている。